

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

桃源郷	P 3
チコロナイの現状と今後の方向	P 4
春の黄土高原へのお誘い	P 6



大同第二火力発電所の資金提供で建設される小学校のレンガ運びを手伝った (天鎮県趙家溝村)

GENに参加するには

- 会員・会報購読者になる
- 自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ワーキングツアーに参加する
- ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- 使用済みテレカ・オレカを集めて送る

etc.

あなたのご参加を待っています!

1995・12

42

いちばんの苦勞が解決されます

～天鎮県李二烟村給水プロジェクトの進行状況



山の中の坂道ばかりの村、李二烟

天鎮県の李二烟村は、緑の地球ネットワークの協力地域のなかでも自然環境のもっとも厳しい村のひとつです。いまにも崩れそうな土づくりの家々が、同じ色の黄土丘陵に溶け込んで、ちょっと離れると、そこに村があることさえわからないくらいです。村のなかに井戸はなく、谷底の湧き水にたよって生活してきました。急な坂道を天秤棒をかついで1日に何度も往復するのはたいへんな重労働で、危険もともないます。

数年前、県の中心部の人たちの募金で給水設備が建設されることになりました。新しく水源を掘り、村のなかに貯水池をつかって、塩ビパイプで結んだのですが、そこで資金が底を尽いてポンプが買えず、せっかくのプロジェクトが眠り込んでしまいました。

その事情を3月に聞き、村の人たちに支払う植木の労賃をつかって復活させてもらうことにしました。この夏のワーキングツアーが村の人たちといっしょに完成させることになっていましたが、雨のために村に近づくことができませんでした。

この夏の大雨のため、この村も大きな被害をうけました。あちこちが地崩れし、給水パイプも寸断されたため、状態が落ちつくのを待って、新しくやりなおすことになりました。必要な資材がすでにそろい、秋の収穫後に着工

することになっていましたので、もう完成していることでしょう。

このプロジェクトを計画し、実行している天鎮県の青年団のメンバーが、村の人たちの期待の声を集めて送ってくれましたので、ご紹介します。

- 給水プロジェクトにたいする人びとの意見 -

李生和 男 44歳 教員
4人家族 ロバ1頭ヒツジ10頭

これまで水の問題ではとても苦勞してきました。日本の緑の地球ネットワークの資金協力は思いもなかったことであり、私たちは諸手をあげて歓迎し、感謝します。村のみんなは中日友好を長く心にとどめることでしょう。

張淑珍 女 38歳 農民
5人家族 ロバ1頭ヒツジ48頭

飲み水の苦勞が解決されるのは、すばらしいことです。男手のない家庭にとって、水を担ぐのはたいへんな難題でした。水の心配をしなくてすむようになることで、私たちはみなさんの無私の協力にととても感謝しています。

李果 男 44歳 農民
7人家族 ロバ1頭ブタ1頭

水を飲むための困難が解消されるのはとてもいいことです。見返りをいっさい求めず無償で協力してくれるそうですが、もうしわけない気持ちです。彼らを村のお客として、なんどでもこの村に招きたいと思いません。

馮翠珍 女 51歳 村の
婦人会主任

2人家族 ロバ1頭ブタ1頭

丘陵に住む私たちにとって、急な坂道を遠くまで水を担ぐことはとても不便なことでした。水問題の解決は、私たちの日常生活のいちばんの苦勞が解決されることであり、たいへんな便利をもたらしてくれます。私たちのいちばんの悩みをなくしてくれることにたいして、私たちは心から感謝します。

王福雲 女 78歳 農民 2人家族

水を飲むことはとてもたいへんでした。つれあいはもう81歳ですし、よそに嫁いだ娘にいつも水汲みを頼むわけにはいきません。年とった私が水を担ぐのはとてもたいへんです。日本の人たちが谷底の水を上まであげるようにしてくれることは、私たちのような老人家族にとってとてもありがたいことです。心の底から感謝しています。

李改花 女 17歳
5人家族 ロバ1頭

水を汲むのは困難なことです。父親がいないときは私が水を担ぎます。坂道は長く、急で、水を運ぶ途中で何度も何度も休まなくてはなりません。あるときは谷底に転げ落ちたこともあり、まだ成熟していない体に大きな傷害を残しました。給水プロジェクトができれば、そういう苦勞がなくなるわけで、私たちは心から(3ページ下へつづく)



涸れたことがないのが自慢の湧き水(円内)、急な斜面は雨の日や道が凍てつく冬には危険がともなう



桃源郷

小松 光一（お茶の水女子大講師）

陶淵明は、老子の「小国寡民」の考えをもとに、「桃源郷の記」というのを書いたのだといわれている。

老子のあまりにも有名なこの警句は次のようにいう。

結繩而用之 / 甘其食 / 美其衣 / 安其居 / 樂其俗。

まあ、「文字を使ったりするごさかしさ、をやめ、現在の衣食住に自足しているのだ。文句あつか」というようなことだともいえる。

先日、僕は、^{やさか}島根県弥栄村をたずねた。世帯数800戸、人口1800人、という、とほもなく高齢化がすすみ、若いもんは村を逃げ出し、かくて過疎といわれる村になってしまっている。

中国山系の分水嶺にあるその村は農業をやるうにも傾斜度はつよく、田畑も小さい。

そこに根をはった若ものたち（といっても、30代、40代だが）と話しあいをしていたとき、ふと、僕は、老子の「小国寡民」という桃源郷をめまいのするようなかんじて思いうかべていた。

「弥栄協同農場」「弥栄村青年セミナー」「なんとか商会」などにかかわる彼らの話しあいは、過疎のへき村を逆手にとって、酒蔵をおこし、日本酒の生貯蔵（ライスワイン・セラー）もつくり、伝統食をベースにした健康村づくりをおこし、そして、気の充実した流れをつくるために、メディテーション・ウッドを拓き、香をつくり、つまり、水と森のもたらす深いめぐみを

もとにした、自身たちのライフスタイルと村づくりを話しあっていたのだった。

すでに、弥栄村では、「共同農場」が、かの有名な「弥栄みそ」をつくり出しており、さらに、「やさか仙人」という山廃じこみの吟醸純米酒を、自分たちのつくった有機農法の酒米でかもし、村内だけで消費している。

岡本さんというおじいさんは抗生物質をいっさい使わないでヤマメの養殖をしている。

僕は、ゆずとみそをじっくりと手を加えて加工した「ゆべし」をおみやげに買って東京に戻ったのだった。

これは、熱あつのごはんと一緒に食うとばつぐんにおいしく、日本酒のつまみにもいい。

弥栄村の帰り、バスにゆられながら、感じていたのはこういうことだった。

「思うに、幸せというのは、自分が幸せだと自足すれば幸せなのであり、自分が不幸だと思いつづければ際限なく不幸なのだ。弥栄村のあの若ものたちは幸せなんだな」と。これは、今夏、モンゴルに行ったときも感じたことだった。

日本人は誰もモンゴルの遊牧民が貧困だとは思っていない、うらやましいとさえ思っている。しかし、現実、日本の消費文明からみれば圧倒的に貧しいのだ。

問題は文化の問題のように思われる。

おそらく、幸福というのは、物質的な差異の問題というよりも、自ら、何が幸せなのかを自己決定することのできる文化の問題なのだ。

黄土高原にも、この夏、高見さんのお世話で、僕たちはゆくことができたが、おそらく一定の物質的基盤のうえに（たとえば、一定の自給自足型くらしのうえに）、そうした文化の問題が課題になるのだろうか、と思った。

山西省の村むらが桃源郷になる、というのはどういうことなのか、他者ではなく、村人がそれに結論を出すしかないのだが。

そういえば老子はこうもいっていた。

「我れに三宝有り、人や自然をいつくしみ、ものをひかえめにし、何事も社会の先端に立とうとしない」というようなこと。

中国の人びとは、いま老子など読むのだろうか。



桃源郷を夢みるのだろうか（『金色の夢』倪雲翔撮影）

（2ページからつづく）この援助に感謝しています。

李 池 男 46歳 5人家族
ラバ1頭ブタ1頭ヒツジ10頭

水のあるところから遠く離れているため、水を担ぐのはとてもたいへんでした。1日に少なくとも3回は往復しないとダメです。雨の日とはとくにたい

へんです。給水設備ができ、水の問題が解決すれば、たくさんの時間を節約でき、生活にゆとりが生まれます。私はこのことをとてもうれしく思っています。

李 生 斌 男 64歳 農民
1人暮らし

私は1人で1ヘクタールほどの畑を耕

しており、耕作で疲れたうえに、水を汲む不便が加わって、毎日、精魂の尽きる思いでした。給水設備ができれば、ちょっとだけ水を担げばよく、苦労の大半がなくなります。人間は老いとともに、体が不自由になります。年とって水を担ぐ苦勞を心配しなくてすむようになって、私はほんとうにうれしく思います。

チコロナイ学習会の報告

国立民族学博物館見学と

大塚和義教授のお話



アイヌ民族の歴史、アイヌ新法など話しはつきない

月9日は第8回で、岡山の眞実一美さんの『アジアの先住民族問題について』のお話。そして来年1月には、菅野茂さんの講演会を大々的に開くことができるようになりました。アイヌ民族と樹木のかかわり、森の大切さについてお話しくださる予定です。私たちの運動の精神的な柱になるような大切なお話が聞けるものと大いに期待しています。ぜひ多くの人に聞いてほしいと思います。またチコロナイ学習会は2月以降も続けますので、輪に加わってくれる方をお待ちしています。

さて、11月は大塚先生のご厚意で、“民博”で開かせていただきました。3時から研修室で1時間半ほど先生のお話を聞き、その後で、民博のアイヌの展示や、特別展『現代マヤ』も見せていただきました。

大塚先生のお話は、以前に大きな会

場で聞いた講演とちがって、実にざっくばらんで打ち解けたお話でした。ご自身がなぜアイヌ民族とかかわる研究をするようになったのか、人類の歴史としての、縄文時代の狩猟採集生活への興味、異民族、異文化理解の原点としてのアイヌ民族の問題の2本の柱があったことなど、いまでもよく理解できます。

いままで、私たちの祖先、いわゆる“和人”がアイヌの人たちをどう扱ってきたか、ひどい歴史のことも聞きました。とくに明治時代の近代国家形成の過程でアイヌ民族の独自性を破壊してきたこと、それはいまでも続いていて、『旧土人保護法』も、特別な『開発庁』も、植民地の扱いといっても過言ではない。国連の世界先住民(族)年の取り組みも、このような近代国家形成の枠組ができるまで、それ以前からそこに暮らしていた先住民族の尊厳を回復することが目的だから、アイヌ民族も当然対象であること。このような位置づけのなかで、アイヌ新法の意義が語られました。まだまだ書きつくせませんが、紹介されたリーフレット『アイヌ - 民族と文化の現在』(学習研究社)や最近出版された著書『アイヌ・海浜と水辺の民』(新宿書房)を読んでもっともっと勉強していきたいと思っています。(武田繁典)

アイヌモシリでの森林回復

ナショナルトラストチコロナイの現状と今後の方向

武田 繁典 (GEN世話人・高校教員)

チコロナイの運動は、2年間の調査研究、準備のあと、第1期計画が昨年12月10日に開始されました。北海道平取町二風谷の貝澤耕一さんと私たち、「緑の地球ネットワーク」が常に連絡を取り合い、相談しながら進めてきました。11月末まで、寄付をよせていただいた人が270人、寄付金の総額は4,036,870円になりました。第1期計画は300万円が目標であったので、一応これが達成されたこととなります。

そして、『緑の地球』40号(1995・10)で報告しましたように、第1号買

い取り地がきまり、手続きも順調に進んで、登記、代金支払いが終わりました。残りのお金は、買い取り地の維持管理費として20万円、別の山林約21haの保全契約の費用15万円を残して、あとを第2期計画に繰り入れます。

第2期計画については次号で詳しくお知らせしますが、第1号地に隣接した山林を買い取るために、12月10日より、2年間で700万円を目標に募金活動を始めます。第1期計画でできた270人の輪が2倍、3倍になって広がっていくことを願っています。今後の進め方な

どについてアドバイスやご意見をお寄せください。





二風谷で思ったこと

～夏の二風谷ワーキングツアー感想文から

自然への畏敬の念に学ぶ

上野 白湖（北海道）

私は、緑を守ろう、自然を守ろう、地球にやさしく、というような態度は傲慢なことだと、いつしか思うようになっていました。小さな、迷いのかたまりのような弱い人間、そんな人間から生まれた科学も哲学も、地球という大きな手のひらの上でうごめいて迷惑をかけているだけなのではないのか。まさにアイヌの文化は、私がやっと気のついたことを、ずっと昔から具現し続け、さらに警告を発し続けてくれたのだと、不十分ながら、今回、覚らせていただきました。二風谷の近くに5年間も住みながら、対岸にいた、愚かな自分がそこにいました。

アイヌもふくめ、先住民族には自然への深い畏敬の念が共通しているように思われます。そこに光をあて、学び合うことが不可欠になっているのではないのでしょうか。その認識をもつ者も、もたない者も、これは、選択の余地のないところにきてしまっているのかもしれない。少々短絡的かもしれませんが、危機感すら感じさせられました。

地球をこれ以上傷つけず、少しでも回復をという願いは、みなさまと共有できるのですが、そこに迫っていく切り口を示していただいたことによって、私のなすべき仕事を見つけれられるという、自信のようなものを得ることができたのです。二風谷でお会いしたみなさま、ありがとうございました。

何も知らなかったけれど

服部 桂子（大阪府）

「チセのなかで出会ったおばあさん、にこにこしながら流暢なアイヌ語でみんなと話をしたなあ。おばあさんが小さいころは、チブサンケのお祭りにいまのように観光客が来るなんてことなかっただろうな。...小さい子もいっぱいいた。あの子たちはアイヌ語がわかるのかな。それともやっぱり習いに

行くのかな。習うのだとしたら...自分たちの言葉を習うなんて変だな。でもそういう環境にしたのは誰なんだろう」

「アイヌのお年寄りの人は、みんないい表情をしている。“古くても珍しがられず大切にされないのは、人間だけだ”といつか新聞にのってたなあ。でもアイヌの人はちがうんだな」

二風谷から帰ってきたいまも、頭のなかでいろんな思いがぐるぐるまわっている。それがはっきりとした形にはまだなっていないけれど。

こないだまで、アイヌについて何も知らなかった。中曽根さんが、日本は単一民族国家だといっても、そうだなあと思っていたし、学校で“シャクシ



チコロナイの森で話す貝澤耕一さん

ヤインの戦い”を“～の乱”と習っても何とも思わなかった。そしてこれのこと、どれほどアイヌの人たちのところを傷つけていたかも知らなかった。

なんだかちっとも考えがまとまらないけど、急いで答えを出してもいけない気がする。頭のなかのぐるぐるとしっかり向き合ってみようと思う。

萱野茂さん講演会のお知らせ

緑の地球ネットワーク・チコロナイ部会では、ナショナルトラストによる山林買い取り、『アイヌの森』回復の運動をより発展させるために、かねてから萱野茂さんの講演会を大阪で開くことを念願していました。各方面のご協力により、下記のように実現することになりました。ぜひご参加ください。

また、協賛の団体や世話をしてくださるスタッフを広く募集していますのでご連絡ください。

日時：1996年1月20日（土）15時～17時

場所：オークホール（ORC200ハーブ館6階）大阪市港区弁天町1-2（JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅から徒歩3分）

内容：講演『アイヌ・人と自然の共

存』15時～16時30分

講師：萱野茂氏（二風谷アイヌ資料館館長・参議院議員）

アイヌ古式舞踊16時30分～17時

北海道平取町アイヌ文化保存会とチコロナイの仲間

定員：300人

参加費：1000円

問い合わせ：緑の地球ネットワーク・チコロナイ部会 武田繁典（TEL/FAX. 0727-63-4171）

参加申し込み：大阪市立弁天町市民学習センターへ電話申し込み（TEL. 06-577-1430）（定員をこえると締め切りますのでお早めにお申し込みください）

主催：緑の地球ネットワーク
大阪市立弁天町市民学習センター
ORC200連絡協議会

後援

大阪市教育委員会

（財）大阪市教育振興公社

春の黄土高原へのお誘い

ワーキングツアーのご案内

寒いという知らせに防寒準備をそろえて行ったら昼間は25 という暖かさに驚いた94年。4月に入ったというのに雪が舞い、零下の寒さに震え上がった95年。回を重ねて、もうよくわかったかと思っても、何があるかわからないのが黄土高原です。

とくに95年は災害があいつぎました。干ばつ、洪水、長雨、早霜。その厳しい年をこえて、GENの緑化協力が地元の人々にどう受けとめられているのか

確かめるチャンスです。

春の黄土高原WTの特長は、なんといっても植林。夏のWTの時期には難しい植樹ですが、春はシーズン真最中。天候さえよければ、ふしぶしが痛くなるほど作業ができます。「地元の子もたちががんばるし、負けられないでしょ」 - 瞬間風速では、日本人は負けてはいません。もちろん、参加者各自の無理のないペースで結構です。

今回、航空運賃の値下げにより、ご

参加いただきやすい費用になりました。ぜひ、この機会をご利用ください。

日程

3月26日（火）～4月5日（金）

関西新空港発着

費用

一般 = 16万円、学生 = 15万円（航空運賃、中国での宿泊費 / 食費 / 交通費、ビザ取得手数料、GENの会費1年分をふくむ。中国国際航空利用予定）

お申し込み、お問い合わせはGEN事務所まで。TEL. 06-583-1719

申し込み締め切り：3月5日

黄土高原へ ひろがる関心 ～東京で報告会

国民森林会議が主催する連続講座「世界の森林と日本」のなかで、中国黄土高原の森林再生がとりあげられ、12月9日午前、東京・本郷の学士会分館での集まりに、高見事務局長が出席して、報告をおこないました。

現地的情況をスライドで紹介したあと、人類文明の発展とともに森林が消失したこと、中華人民共和国建国以後の緑化への試行錯誤、現在の植林のようす、緑の地球ネットワークの協力のありかたなどを報告しました。

そのあと現地の農村の生活のようすなどについて、熱心な質問と交流がつづき、「黄砂の問題など、環境問題が国境をこえていることをもっと訴えたらどうか」といった意見も出されました。黄土高原の諸問題について、日本のなかでも関心が広がっているのはとてもうれしいことです。



ひきつづき

カンパのお願い

先月号でカンパをお願いしましたところ、レンガ代をはじめたくさんお寄せいただき、ありがとうございます。零下30 になる大同の冬をすきま風のはいる仮設小屋でこさなければならぬ人たちのことを思うと胸が痛みますが、GENの力では小学校建設のレンガ代あつめが精一杯です。また、緑色地球ネットワークでも、「何かできることはないかというみなさんの気持ちは嬉しいけれど、災害救援の輸血的な援助よりも、基礎体力をつける従来の緑化協力を続

けてほしい」といっています。

現在、緑化協力資金の多くは、郵政省国際ボランティア貯金をはじめとする各種の助成金でまかなわれていますが、GEN独自の緑化基金は、結成当時とくらべてあまり増えていません。「外部助成の金額の半分くらいは自力で集めない」とは無理にしても、今年目標額にもほど遠い現状です。というわけで、今回のカンパのお願いの重点目標は緑化基金です。冬のボーナスからほんの少し、ご協力くださると嬉しいです。



何かできる

吉元 一成（神戸市）

使用済みテレフォンカードを同封しております。

以前、資料をお送りいただき、1枚で10本もの苗木に生まれ変わることを知り、友人に話したところ何人もの友人が少しずつ持ち寄ってくれたものです。

地球の大きな問題のひとつ、“砂漠化”というとても大きくことに地道に取り組んでいらっしゃる皆様の姿に感動すら覚えました。個々の立場により、可能なことは何かあります。それをひとりひとりが心がければよいのでしょうか。私には、いま、こうして、テレフォンカードを送ることぐらいしかできませんが、皆様のご活躍をお祈りしております。

ありがとうございます。ひとりひとりのできることは小さくても、それが集まれば大きな力になる。みなさんの力をGENにちょっぴりわけてください。

箕面の森へ春を探しに～

自然と親しむ会のお知らせ

立春をすぎてそろそろ春のきざしを見せはじめの箕面の森を、『山西省の自然』を会報に書いていただいた石原忠一先生といっしょに歩きませんか。

まだまだ寒さの厳しい時期ですが、葉を落としたときならではの木々の美しさや、冬を越した植物たちが春の準備をはじめようすを、あちらこちらで見ることができます。氷河期などの気候変動を生き抜いてきた植物たちの冬を越す知恵など、いろいろと興味深いお話を聞くことができるでしょう。

日時：1996年2月18日（日）9時30分～16時

場所：箕面の森ビジターセンター

参観とお話、周辺の森を観察
案内とお話：石原忠一先生（自然と緑を守る大阪府民会議議長）
集合：阪急箕面線箕面駅に午前9時30分

もちもの：お弁当・水筒・メモ（石原先生の簡単な講義があります）歩きやすい靴と、手袋など防寒のご用意をお忘れなく。

問い合わせ・申し込みはGEN事務所まで。TEL. 06-583-1719

申し込み締め切り：2月15日



特集 私の本棚

年末年始ともなれば「出かけるのは寒いけどテレビも特番ばかりでろくなもんないし」と手持ちぶさたにこたつでみかんを食べてる人、けっこうおいでだと思えます。そんなあなたにこたつの友をみつけてもらおう。というわけで、『私の本棚』特集です。

「私は忘れない」 有吉 佐和子
新潮文庫 400円

森林の減少を少しでも食い止め、緑豊かな地球を守ってゆきたい。そんな漠然とした思いからGENに参加し2年が過ぎました。その間に2度、黄土高原を訪れる機会に恵まれ、一口に「環境問題」「森林の減少」と片付けてしまう問題に内包される、さまざまな問題をかいま見てしまったような気がしています。

地球規模での環境の悪化に伴う気候変動が危惧されており、先進国と言われる私たちの生活を「変えなきゃ！」と言われるようになって久しいです。特に、食料資源の多くを海外に頼って

いる日本にとって、世界のどこで凶作が起きて、それが直接私たちの生活に影響を及ぼすはずは、しかしながら、自国の米が不作のときにも「どこからともなく」食料を調達し「米が無ければうどんでもパンでもあるさ！」と言ってしまふ私たちに環境問題が目に見えて感じられる頃には、黄土高原のように現在でもぎりぎりの生活を送っている人達はどうなってしまうのだろうか？ この本は、いままでに考えていて当然だったこんな問いを、改めて投げかけてくるように思えました。

この本の舞台になるのは、日本が高度経済成長を続けていた昭和35年頃。東京で「フワフワと生きてキャアキャアと叫んで、何も考えずに青春を過ごして」いた一人の女性が、ふとしたきっかけから薩摩半島の南に浮かぶ孤島「黒島」を訪れます。彼女はそこで、ここが東京と同じ国なのかと思えるほどの、苛酷で孤立した島の生活を目にします。そして、この地で20日を過ごした彼女は、この島で過ごした日々を「忘れない」事の意味を、東京で改めて認識します。

「文明にだれきっている都会の人間

ビデオ 『黄土高原に緑を！』を よろしく

ときどき、「黄土高原のビデオはもう売ってないんですか」というお電話をいただきます。もちろん、売ってます。まだ見ていないあなた、お正月にご覧になりませんか？ お里帰りの家族みんなで見るのもいいかも。

また、学校や地方自治体の国際交流協会、ビデオライブラリーなどに購入のリクエストをしてくださったら、一般の方がたにも広く黄土高原の事情を知っていただくきっかけになります。

ビデオ『黄土高原に緑を！』は、会員価格3500円、一般価格5000円（送料390円別途）でおわけしています。お申し込みは、GEN事務所まで。



にとって、僻地を忘れずにいることは、ある意味での覚醒剤です。」

著者の訴えるこの一行は、私にとって、あの黄土高原での日々を再認識させる重い一言です。

私たちは、新聞やテレビを通じて、同じ地球の上でぎりぎりの生活を続けている人達がいることを知識として知っています。しかし、彼らが今、自分と同じ一分一秒を過ごし、同じ“日常”を生きているという当たり前のことを、私たちは本当に理解していると言えるのでしょうか？

自分と同じ時を過ごしている多くの人達を認め続けること、彼らの存在を認識し続けること。そんなあたりまえと思えるような事の意味を、再認識したような気がします。（嶋田光雄）

「地球温暖化を考える」 宇沢
弘文 岩波新書 620円

世界中で異常気象が問題になっている。熱帯原産の毒グモが大阪で越冬し繁殖したり、熱帯の植物が屋外で平気で育ったりするように、暖冬はあたりまえになってきたし、夏の炎暑やカラカラ天気もつづいている。その反面、

欧米で厳寒のため死者がでる、といったこともよく報じられるし、8月には南米で百万頭ものヒツジが凍死したニュースもあった。私たちの協力地・大同では、数十年なかった春の大干ばつのあと、夏には百年このかたなかった大水害にみまわれ、さらに早霜の追い打ちまでうけた。

宇沢弘文さんはずっと以前から環境問題ですぐれた発言をされてきた経済学者だが、この小さな本は、衝撃的な内容をもっている。地球のあちこちで起こっている異常気象の原因は、結局のところ「地球温暖化」に帰着するというのだ。

温暖化の原因はいうまでもなく、二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスが異常にふえつつけていることにあり、それは化石燃料の大量消費と、熱帯林を中心とする森林の消失とによっている。世界経済の現状を考えれば、これから21世紀にかけて、温暖化のさらなる激化は避けられまい。

気象を決定する要素は複雑だから、温暖化が特定の地方の気象にどう影響するかは簡単にはいえないけれども、一般的に、これまで雨が多かったパングラデッシュのようなところはいつそう多くなり、これまで雨が少なかったところはいつそう少なくなる、それはまちがいないだろうといわれる。そして中国の黄河流域は、極端に雨が少なくなるであろうところのひとつにあげられている。

だとすると、いま黄土高原ですすめられている森林の再生はもちこたえることができるだろうか。いや、そんなこと以前に、いまでも限界的な生活を送っているあの地方の人びとは、「環境難民」化する以外にないのかもしれない。

温暖化が引き起こす海水面の上昇にしても、異常気象にしても、その影響をいちばん強くうけるのは、おてんとうさまにたよる仕事、農業者であり、世界のなかでも貧しい地方の人びとである。温暖化の原因にいちばん遠いところで生きている人たちが、被害だけは最大にうけるのだ。

私たちの緑化協力も、もうひとつ大

きな、新しい枠組みのなかで考える必要があるのではないか。そのことを痛感させられた一冊だった。(高見邦雄)

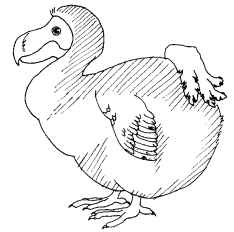
「生物多様性」 堂本 暁子
岩波同時代ライブラリー 1000円

ドードーという鳥をご存じでしょうか。いまとなつてはユーモラスな絵姿を残すだけの飛べない彼らは、モーリシャス島で天敵もなく平和に暮らしていました。しかし、400年ほど前人間が島にイヌやネズミを持ち込むと、ひとたまりもなく100年足らずで死に絶えてしまいました。そしてその結果、現在、カルバリア・メジャーという木が絶滅しつつあります。この木の種が発芽するには、一度ドードー鳥に食べられる必要があったのです。いま見られるいちばん若い木でも樹齢300年ほどだといえますから、ドードー鳥の絶滅以後新しく発芽していないのです。

裁判の原告に名を連ねて有名になったアマミノクロウサギですが、国際自然保護連合のレッドデータブックに絶滅危惧種と指定されているこのウサギをめぐる、政府と環境庁のなんともやりきれない対応が、この本に紹介されています。1993年の衆院予算委員会で、著者が奄美諸島の調査を要求した際、宮沢総理(当時)は、「予算が要るのなら、金の方はいいんですが、人の方が難しいでしょうか、(中略)行政の方でも力をひとつ尽くしてもらいたい」と“前向き”な姿勢を見せました。ところが後日、著者が自然保護局長に調査の進展を確かめたとき「予算はいくらでしょうか」と尋ねると、なんと「アマミノクロウサギについては3万円ほどです」という返事。その後、年を追って予算は増えてはいるものの、一方で訴訟にいたった経緯はご存じのとおりです。

ドードー鳥を絶滅に追いやったとき、人間は何をしているか知りませんでした。けれど、現在は十分に自覚しながら、稀少生物にドードー鳥と同じ運命をたどらせ、潜在的なカルバリア・メジャーをつくりだしています。トキの絶滅やアマミノクロウサギの危機は明らかに環境破壊の結果であり、それは

とりもおさず私たち自身の生活環境の悪化を示しています。そのことが政治の場でどのように認識されているのか、というよりいかに認識されていないのか、この本はその現場からダイレクトに伝えてくれます。(東川貴子)



独断と偏見によるそのほかのおすすめ「大江戸えねるぎ事情」「大江戸テクノロジー事情」「大江戸リサイクル事情」石川英輔、講談社(前2冊文庫) / 「日本の樹木 - 都市化社会の生態誌」辻井達一、中公新書 / 「草原の記」司馬遼太郎、新潮文庫 / 「我が隣人の犯罪」宮部みゆき、文春文庫

編集後記

1995年が、暮れようとしています。阪神大震災にはじまり、一連のオウム真理教事件、金融機関倒産、など大変な年でした。

「神戸に大地震はこない」その“常識”を打ち砕いた阪神大震災。いまなおおたくさんの人たちが、“旧避難所”や“待機所”、交通の不便な仮設住宅で生活をつづけておられます。

「異日常」ということばが、新聞で紹介されていました。突然、「日常」をささえていた条件が破壊されたら、「非日常」になります。その状態が何か月も、1年も2年もつづけば、それはもはや「非日常」ではなく、かといって「日常」ではありえず、「異日常」と呼ぶのだと。

私はさいわい、2か月ほどの「非日常」(ガス復旧まで)のあと、「日常」に復帰できました。このごろは「日常」のありがたさも忘れがちです。年の瀬を前に、もう一度「日常」のありがたさを思いださなくちゃ。お世話になったみなさん、ありがとうございます。そして新しい年こそはみなさまが幸せな「日常」をすごされますよう、お祈りいたします。(東川)